



坂本龍馬  
いとう



海援隊旗(二曳きの旗)

<http://www.ryoma-kinenkan.jp>

## 桜花 OUKA RANMAN 爛漫

# 特別展「花と歴史の爛漫土佐」

高知県といえば坂本龍馬、そのイメージとして有名な、台にもたれて右手を懐に隠れた写真、あるいは、その写真を基にした、桂浜の坂本龍馬像を思い浮かべる方が多いのではないのでしょうか。龍馬像は桂浜のシンボルともいえる存在で、建立され90年以上たつ今も多くの方に親しまれています。その龍馬像や本浜(渚)があり、当館も立地する「桂浜公園」が約40年ぶりのリニューアル。全体の工事を終え、令和5年3月4日にグランドオープンしました。

また、高知県が生んだ世界的な植物分類学者牧野富太郎博士がモデルの主人公のドラマ「らんまん」(NHK朝の連続ドラマ)の放送が4月から始まりました。「桂浜公園リニューアル」と「らんまん」放送の2つを記念し、当館では特別展「花と歴史の爛漫土佐」を4月28日から10月1日まで開催いたします。7月2日までの前半は第1部「桂浜シン発見・浦戸湾歴史探訪」、7月15日からの後半は第2部「月と龍馬の桂浜・坂本龍馬像物語」の2つの展覧会で構成いたします。

### 第1部 「桂浜シン発見・浦戸湾歴史探訪」

四国八十八カ所の第31番札所竹林寺のある五台山には、県立牧野植物園があります。五台山や園内の展望台からは浦戸湾を眺めることができます。浦戸湾は、平安時代の紀貫之による日記文学「土佐日記」にもその名が出ているように、昔から交通の要衝地でありました。それと同時に鎌倉時代末、高僧・夢窓疎石がその美しい景観から10を選び「吸江十景」とするなど、風光明媚な地でもありました。

特別展第1部では、船が行き交い、海の玄関口であった浦戸湾各地にまつわる歴史を、絵画を中心に紹介します。文人たちが訪れる名勝地から観光地へと移り変わる桂浜も絵葉書や観光パンフレットなども含む多彩な資料をご紹介します。

### 第2部

#### 「月と龍馬の桂浜・坂本龍馬像物語」

特別展第2部では、桂浜のシンボル「坂本龍馬像」に焦点をあてます。坂本龍馬像を制作した彫刻家・本山

白雲(宿毛市出身)や宮内大臣も務めた田中光頭(佐川町出身)らを中心に、建立に至るまでの逸話を紹介します。

令和5年の特別展では、桂浜や浦戸湾にまつわる歴史エピソードを紹介します。路線バスなどをご利用のうえ、現地をお訪ねいただき、高知県の豊かな歴史を感じていただきたいと思っております。

また、県内各地の博物館を中心に絵画作品や資料をお借りします。それぞれの資料を収蔵している博物館もお訪ねいただき、県内の様々な文化資源を堪能いただきたいと思います。

河村章代



坂本義信「土佐三十絵図」より  
「桂浜」(高知大学学術情報基盤図書館所蔵)

## 特別展「龍馬の師 勝海舟生誕二百年」展を振り返る

# 龍馬の師・海舟と龍馬の係わりを具体的な資料で紹介 熱心に観覧する姿が印象的

明治23(1890)年に海舟が編纂した『追賛』に龍馬評が載っている。そこにある海舟が残した龍馬の西郷隆盛評は興味深い。「初めて西郷に会す。其人物茫漠として摸捉すべきなし。之を大きく叩けば大なる答えを見、之を小さく叩けば小なる答えを見る」(初めて西郷に会ったが、大きくて捉えどころがない人物である。西郷に質問を投げかけると)大きく叩けば大きく答え、小さく叩けば小さく答える)というもの。その龍馬の鑑識眼に海舟は感じ入っている。

海舟は「余深く此言に感じ実に知言と為せり。凡そ人を見るの標準は時価の識慮に在り。氏が西郷を評するの語以て氏が人物を知るに足らん」(私はこの龍馬の言葉に感じ入り、道理にかなうた知言だとする。人を見極めるということは時に応じた状況を深く理解することが必要だ。龍馬氏が西郷を評した言葉によると、龍馬は人物というものを正しく理解しているということに満足できる)と、その理由を述べた。

龍馬は土佐を脱藩した文久2(1863)年も終わろうとしたころ、海舟に会い弟子となったようである。それから神戸に海軍操練所や海軍塾を

建設しようとする海舟の下で活動する。しかし、2年後の元治元(1865)年11月に海舟が軍艦奉行を罷免、左遷、蟄居という状態になって以降、相見えることはなかった。28歳から30歳という若い龍馬が、師である海舟から大きな刺激を受けたことは龍馬の手紙や行動の端々、ひいては亀山社中、海援隊という組織を率いる道筋を見ても間違いない。海舟もまた明治半ば過ぎでも『追賛』に見られるように、龍馬の人となりを高く認める記述をするほど龍馬の存在を忘れていない。

今回の特別展では、この二人のつながりを軸に、龍馬が「日本第一の人物勝麟太郎という人」「天下無二の軍学者舟の生い立ちから最期までその人生を辿った。中でも龍馬が海舟の下で「日々兼而思付所をせいといたしおり申候」(日々海軍のことに励んでおります)と言った海軍建設、その礎となった海舟と親しんだ伊勢松阪の竹川竹斎の『護国論』をはじめとした重要な資料を展示することができた。

また、海舟に関わる咸臨丸渡米や江戸無血開城に関する著名な資料も借用展示できたことは、各関係機関や関

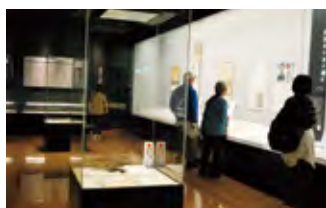
係者への感謝に堪えない。咸臨丸に通訳として乗船した中濱万次郎がその時使ったという葦山笠や、ローマ字表記の俳句などにも関心が集まった。

それにしても会場を訪れた人たちが熱心にご覧になっている姿は印象的であった。ガラス面にくつつかんばかりに、あるいはメモを取りながらの様子は会期中絶えることがなかった。

会場は2会場に亘り、企画展示室で海舟その人の生涯や龍馬との出会いを紹介。常設展示室の一部では龍馬が海舟の下で動いた神戸時代を深めた。

前半1か月で約1万人の方たちにご覧いただき、4月16日に終了するも、海舟と龍馬への関心の高さを実感する日々であった。

前田 由紀枝



●上は常設展示室の一部



●主会場(企画展示室)の様子

## 冬のイベント 振り返り

冬の恒例行事となってきた感のある「ウォーキングイベント」、今回は、開催中だった企画展「龍馬最後の帰郷―坂本家と川島家・中城家」に関連し、高知市・種崎を歩きました。

1862(文久2)年3月、龍馬は土佐を脱藩します。それからは東奔西走、故郷に帰ることもなく、新しい国づくりに奔走しました。脱藩後、初めて姉・乙女あてに書いた手紙にも「私年四十歳になることまでハ、うちにハかへらんよふにいたし申つもりにて」「つまり、40歳になるまでは、うちに帰らないつもりです、とあります。それから約5年後の秋、龍馬は脱藩後、初めて最後となる帰郷を果たしました(40歳になっていませんが)。そのとき、投錨したのは、浦戸湾御豊瀬の碇石といわれています。そこから、小舟に乗り換え、休息のため、対岸にある種崎の中城家に立ち寄ったと言われています。中城家では、離れでくつろぎ、襖絵を眺めていたということです。こうしたエピソードから、今回は、中城家をメインに、土佐藩の御船蔵のあった種崎をまわりました。中城家



のご厚意で、龍馬が立ち寄ったときから残る、離れを特別に見学させていただきました。



種崎は、目に見えるかたちでの史跡はほとんど残っていませんが、今なお造船工場が立ち、御船倉のあった場所という歴史の雰囲気を感じることが出来ます。町中に溶け込んでいるお地蔵様や長宗我部氏時代の井戸、昔からの神社などを見学し、「江戸時代の種崎」を想像しながら歩きました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、参加者のみなさんは「楽しかった」「また、開催してほしい」といううれしい感想のほか、「あまり知らない地域の歴史を学べるのがうれしい」「昔、種崎に住

んでいたのが懐かしくて参加しました」などのご意見をいただきました。「ガイドブックにのらない地域の歴史を体感する」ウォーキングイベントを今後も続けていきたいと思っています。

令和5年は1月2日から開館しましたが(設備メンテナンスのため元日のみ休館しました)、2日から9日までは新春特別企画として、「りょうま記念館のお正月」を開催、お正月らしいデザインのお菓子のプレゼントの他、ガラガラ抽選会を開催し、本館は華やかな新年らしい雰囲気になりました。(左写真上)

続いて、2月23日(木・祝)から26日(日)の4日間も、イベント「龍馬記念館で歴史の面白さを学ぼう!」を開催しました。缶バッチづくりや「動くぬり絵」の他、クイズラリーなどで、子どもを中心に多くの方が本館内を楽しそうに巡っていました。(左写真下)



河村章代

## 先月12日に開催された「高知りようまライオンズクラブ 結成25周年記念式典」に出席しました。

同クラブ様からはこれまでに当館に

対しまして幕末から明治初期を描いた錦絵をご寄贈いただいています。そしてこのたびは、龍馬が亡くなる前の年、1866年夏頃に大村藩士の渡辺昇に宛てた「勝海舟の動向」を綴った手紙の複製をはじめとする資料整備にご厚志を賜りました。渡辺昇は、龍馬が薩長同盟にあたって長州への働きかけを頼んだ間柄だとされています。龍馬の手紙は、歴史的証言だともいわれますので、貴重な手紙の複製を収蔵できましたことに深く感謝を申し上げます。誠にありがとうございます。

幕臣であった勝海舟は、「江戸総攻撃」に臨む新政府軍と戦わずに、江戸城を明け渡す「無血開城」に貢献しました。江戸が火の海になるのを寸前で回避したのです。

龍馬は、土佐を脱藩後しばらくして勝海舟に出会い、家族に宛てた手紙には、勝を「日本第一の人物」などと心底から感服し、弟子になった喜びを書き留めています。龍馬は海舟門下で海軍

を学びました。

徳川幕府の鎖国政策の下、1853年に米国の黒船がやってきました。「大砲を積んだ軍艦がやってきた。日本が大変だ」と日本中が衝撃を受けました。来航した黒船4隻のうち、蒸気船は2隻、帆船は2隻。蒸気船のうち1隻（「ミシシッピ」）は、およそ1700！乗組員数270名級で、それに対して日本の船（千石船）は、最大で150！乗組員20名級の輸送用の木造帆船であったということ（佐々木克『幕末史』参照）。

ですので、これを契機に日本は近代的な産業にも軍備にも乏しいということに気づいて、今後どのように西欧列強に向き合っていくのか、どうしたら日本を守るのか、という難題に直面しました。

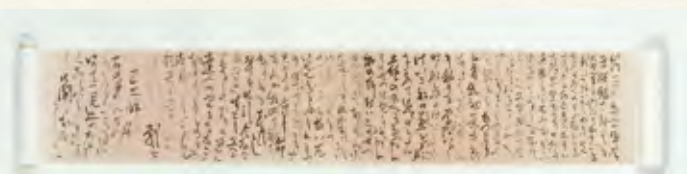
徳川幕府の閣僚を占めていたのは代々受け継がれる世襲の譜代大名で、身分の隔たりなく有能な人材を登用する制度がありませんでした。加えて、長く鎖国政策が続いたため、海軍を持

たない軍事弱小国でもありましたので、西洋列強に対抗できないことが明白となりました。だからこそ龍馬は、西洋諸国に並び立つような日本の政治改革や海軍による国防と、貿易立国を構想したのだと考えられます。

現在当館では、2月16日から特別展「龍馬の師 勝海舟生誕二百年記念展」を開催しています。こうした龍馬の構想のルーツは海舟の教えにあるかと思えます。この特別展では、若き龍馬を鍛えた勝海舟の足跡と歴史的役割を体感していただけだと思います。



江戸城明渡の帰途（勝海舟江戸開城図）  
川村清雄 画 明治18年  
東京都江戸東京博物館所蔵 ※展示は複製



通称「エヘンの手紙」  
坂本龍馬書簡乙女宛 文久3年5月17日（複製）  
原資料は宮内庁三の丸尚蔵館所蔵

# 龍馬の手紙

18

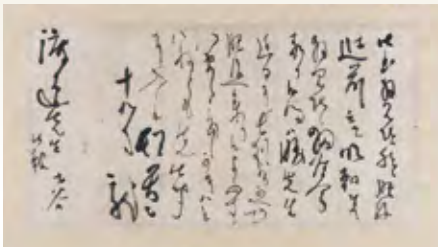
## 短くも奥深い

### 龍馬の書簡

平成二十九年、長らく所在不明だった大村藩士渡辺昇宛ての坂本龍馬書簡が、長崎県大村市に「里帰り」した。筆者が初めて手にした、記念すべき書簡でもある。

慶応二年（一八六六）九月と推測される本書簡。内容は「お手紙を拝見しました。（手紙の）肥後や越前について、明朝まで拝見していました。さて、ただ今（私が）聞いたところ、勝先生は近いうちに長州から帰り、肥後に向かうとのこと。いまだ確実ではありませんが、まずはお伝えしておきます。」とある。

渡辺への返信として書かれたものだが、その簡潔な内容に、はたして意図が十分に伝わるのか疑問さえ覚える。だが、



今日でも知己の間柄では話を省略することがある。本書簡も、龍馬と渡辺が旧知の仲であった証左と言えよう。

一方で、興味深い内容もある。例えば、龍馬は渡辺の書簡を明朝まで読んでいたというが、龍馬を眠らせなかったその内容とは何か。大村藩で諸藩連合を説いた渡辺ならば、当時幕府側だった肥後藩との連携の件ではなかったか。

また、未確定情報でも、あえて伝えた「勝先生」の動向。龍馬にとって、師である勝海舟の動きは、やはり無視できぬものだったのだろう。状況如何では敵対する可能性があった二人だが、龍馬が「勝先生」と記している点に、彼の変わらぬ敬慕の念がうかがえる。

そして、本書簡に付属する包紙に記された「才谷」の署名。その初出は慶応二年十一月の溝淵広之丞宛て書簡と言われている。先の年代比定が正しければ、本書簡は「才谷」の最古例となるのだが、筆者には未だ確たる答えが出せていない。龍馬書簡の研究は、まだ道半ばである。

今回の特別展で、本書簡は龍馬の思いと共に土佐へと帰った。故郷での多くの人との出会いに、天の龍馬も喜んでもらえるならば、筆者にも望外の喜びである。

（大村市歴史資料館 学芸員）

山下 和秀

## Q&A

No.3

当館や高知観光などについて日常寄せられるさまざまな質問と、その答えを職員がリレーでご紹介します。

### 龍馬像へのご案内

Q. 記念館から龍馬像へは歩いて行けますか？

A. はい。遊歩道ルート約7～10分程で龍馬像に到着します。

桂浜周辺のお問い合わせで一番多いのがこの質問です。

桂浜公園内に立つ龍馬像へは遊歩道と車道のルートがあります。おすすめは、記念館前の坂を下り、車道向かいの車の回転広場の奥、遊歩道「椿の小径」を通るルートです。名前のとおり藪椿が両側に並ぶ道（階段あり）を下ると、桂浜が一望できる開けた場所に出ます。そこから少し坂を上げれば、太平洋を臨む大きな龍馬像が現れます。時間にすれば約7～10分程でしょうか。ゆっくり歩かれますと、もう少しお時間が必要かもしれません。

しかし残念なことに、遊歩道は階段で下る場所が多くなっています。車道（記念館前の坂を下り三差路を左折）の歩道側を歩くこともできますが、スーツケースなど大きいお荷物をお持ちの方、階段のご利用が難しい方には、お車でのご移動をおすすめしております。（桂浜公園有料駐車場・公園内スロープあり）

また、桂浜から当館までの道のりは、逆に上り坂となります。少しきつい山登りとなり、初夏以降は皆様汗びっしょりに…。熱中症などにはお気をつけください。

月の名所「桂浜」は公園内の商業施設がリニューアルされ、3月にグランドオープン。水族館のオトドちゃんも大人気。4月からの朝の連続ドラマ「らんまん」で大賑わいの「牧野植物園」へも当館経由の周遊バスで行くことができます。賑やかな春を迎える高知県へ是非お越しください。皆様のご来館をお待ちしております。



遊歩道「椿の小径」

宮崎 圭子

# 県立坂本龍馬記念館（本館）JIA25年賞受賞 建築の存在価値と地域社会貢献への評価として 前田 由紀枝

## 学芸員の視点

当館の本館（1991年8月竣工）はこのほど、第22回JIA 25年賞を受賞した。この賞は、JIA（公益財団法人日本建築家協会）により、「25年以上の長きにわたり、建築の存在価値を発揮し、美しく維持され、地域社会に貢献してきた建築」を登録・顕彰するといつものである。

同時受賞は高知県立中芸高校格技場（高知県田野町）、金沢市民芸術村（石川県）、本の森厚岸情報館（北海道）、霧島国際音楽ホールみやまコンセル（鹿児島県）の計5件で、高知県から2件の受賞というのも嬉しい。

この賞に応募した本館設計者の高橋晶子さん（ワークステーション、武蔵野美術大学教授）は、この賞に対する審査項目の軸として、次の項目を選ばれたようである。

- 建築にこめられた建築家の思想が現在も尊重されていること
- 人々の記憶に寄与する建築であること
- 建築が美しく保たれていること
- 地域社会や周辺環境へ貢献していること
- 所有者、設計者、施工者、管理者の連携が現在もよく取れていること

建築賞の多くは、新築から1、2年以内の状態で評価されるらしい。しかし、この賞は、25年という歳月を社会やそこに関わる人たちとともに活用し続けていることに重点が置かれている。25年という期間は、建造物竣工から活用期間を確認するためにふさわしい長さであろうと聞いた。また、選考基準には、25年を通して建築物の所有者、設計者、施工者、管理者が力を合わせて建物に関わっていることも欠かせないという。

つまり、すべての関係者から長く愛され、使い続けられてこそ得られる賞だということである。記念館を応援し、関わり、また来館してくださったすべての人々に対して、また記念館で働く者にとつて、この受賞は大きな力、喜びになったと思う。

昨夏の応募以来、四国支部審査、最終審査を経て、約半年後の受賞発表であった。審査時には高橋さんとともに私も立ち会わせていただいた。改めて建物の内外を見、審査員各氏の質問に答えるなどする中で、記念館に関わる多くの人たちの姿が浮かんできた。

1991年11月に開館した記念館は、1年間の休館を経て5年前に本館と新館の2館体

制となり、今年2月末現在で451万人余りの入館者を迎えた。関係機関、関係者、職員も増えた。それに伴い坂本龍馬という人物とともに当館の認知度も高くなったと自負する。まさに本館誕生時の「龍馬への入口」から、「龍馬の殿堂」への道を前進している。

建造物は生き物だと思う。活用されない場合、その空気は停滞し、いくら立派なものであっても生気を失う。この建物をステージに、生き生きとした記念館であり続けることは、今後ますます重要になってくるだろう。JIA 25年賞受賞のニュースは、今までの、またこれからの記念館の歴史にとつてかけがえのないものとなった。



JIA25年賞を受賞した本館

## ミュージアムショップ便り

本館出口に位置するミュージアムショップでは、龍馬に関する様々なグッズを始め、年間を通して開催される講演会や企画展関連の商品等を揃えて皆様をお待ちしております。数ある商品の中から今回は、この春より新社会人や新入生になられる方にもぜひご紹介したい、個性豊かなお役立ち商品3点をご紹介させていただきます。

### 「龍馬の箸箱」

4月より新しい生活をスタートさせ、お昼ご飯は持参するという方も多いのではないのでしょうか。

早くその環境にも慣れ、一日のリズムを整える為に“食”は大事な活力！毎日持っていくお弁当箱と共に、お箸や箸箱も必要になってきます。

そこで、こちら“龍馬の箸箱”をおすすめします。

素材は国産の桜材を使用し、龍馬の型押しが入った手の込んだ一品となっております。

本体と蓋に埋め込まれた強力な磁石により、ピタリと閉じて機能的。

温かな素材の色と滑らかなデザインがとても美しい箸箱です。

一度手に取って、使い勝手の良さをご体感下さい。



龍馬の箸箱 大3,520円 小3,300円(税込)  
※お箸はついておりません



龍馬のエコタンブラー 1,500円(税込)

### 「龍馬エコタンブラー」

このタンブラーは有名な龍馬の写真をモチーフにした、個性豊かなデザインが人気の商品で、4種類の絵柄から選ぶことができます。

内容量も350mlと丁度いいサイズ感は、お家での普段使いとしても重宝すること間違いなし！内側はステンレス製になっているので、季節に応じてお好みの温度でお楽しみ下さい。

### 「龍馬の手さげ袋」

お弁当やタンブラーを持って行くには、まとめて持ち運べる袋があれば便利。そんな時にはこちら“龍馬の手さげ袋”が最適！10cmのマチもあり、縦35cm横25cmと余裕の大きさで、他の小物も一緒に入れられる、使い勝手の良い商品です。



龍馬の手さげ袋 1,650円(税込)

いかがでしょうか。こんな龍馬グッズでいっぱいのお弁当を手に、どうぞ楽しい食事のひと時をお過ごし下さい！

西川 知佐

## ■「龍馬記念館で歴史の面白さを学ぼう!」を開催しました

2月23日(木・祝)から26日(日)まで開催したイベント「龍馬記念館で歴史の面白さを学ぼう!」の会場として、「海のみえる・ぎやうらい」では、缶バッジつくりや高知県在住の漫画家・村岡マサヒロさんによるイラストの龍馬との記念撮影などを楽しんでもらいました。

缶バッジつくりでは、元のイラストに自由に色を塗る人もいれば、白紙の台紙に好きな言葉やイラストを描くなど、楽しみ方は様々。今回は、ちょっと珍しい「星形」の缶バッジを作れる器械も設置。出来上がった缶バッジを手にした人は、みんなニコリ、笑顔になりました。

フオトスポットは、当館初の試みとして、バルーン(風船)でアーチをつくってもらい、そこにイラストパネルを立てるかたちになりました。前日にバルーン・アーティストの方がたくさんの風船を膨らませて、組み合わせる様子を見ているだけで、こちらまでワクワクしてきました。龍馬が、乙女姉さんあての手紙に、ちょっと自慢している様子を表している「エヘン、エヘン」を吹き出しにして、それを持って記念撮影をしてもらう工夫もしました。

4日の間、お天気のよくない日もありましたが、快晴の日は、大きな窓からの眺めを楽しむ方とワークショップを楽しむ方で、賑わいあふれる「海ぎやうらい」になりました。



## ■特別展「花と歴史の爛漫土佐」の第3会場として関連展示を行います

4月から、桂浜リニューアルとNHK朝の連続ドラマ「らんまん」放送を記念し、特別展「花と歴史の爛漫土佐」を開催して、高知県の「歴史観光」の面白さを紹介します。本館「海の見える・ぎやうらい」を第3会場として「花と自然の爛漫土佐」と題し、県内の牧野博士ゆかりの地をご紹介します。

高知県には3つの自慢があります。

坂本龍馬に代表される「歴史」。

雄大な太平洋を臨み、県土の8割を占める森林と、「最後の清流・四万十川」「仁淀ブルー・仁淀川」で全国にも名を轟かせる美しい川、という手つかずの「自然」。

そして、その自然の恵みから育まれた、鮮度の高いかんきつや魚、肉、野菜類などの豊富で美味しい「食」です。

新館の特別展、そして「海の見える・ぎやうらい」の展示をご覧いただき、県内各地の「歴史」と「自然」・「食」をご堪能ください。(「食」は桂浜公園内商業施設でもご堪能ください。)

河村 章代

### 入館状況

2023年3月20日現在

(1991年11月15日開館以来 31年146日)

◆入館者数 4,521,952人

■リニューアルオープン(2018年4月21日)以来 585,192人

### 編集後記

春の遠足は桂浜、秋の遠足は高知城。そんな小学生時代を過ごして大人になりましたが、この春、思い出の桂浜が装いも新たに生まれ変わりました。しばらく見ない間に真新しい土産物店や飲食店が立ち並び、昔を知っているだけに感慨深いものがあります。良くも悪くも「昔ながらの観光地」だった桂浜ですが、時代に合わせて進化し、これから訪れる方がたにとって“楽しい旅の思い出の地”となりますようお願いしています(か)。

館だより「飛騰」第125号(年4回発行)表紙題字:書家 沢田 明子氏  
 〒781-0262 高知市浦戸城山830  
 発行日 2023(令和5)年4月1日 TEL (088)841-0001 FAX (088)841-0015  
 発行 公益財団法人高知県文化財団 http://www.ryoma-kinenkan.jp  
 高知県立坂本龍馬記念館 「飛騰」に対するご意見ご感想などお寄せください

開館時間 9:00~17:00 年中無休  
 入館料 一般500円(企画展開催時700円)  
 高校生以下無料

高知県・高知市長寿手帳所持者・療育手帳・身体障害者手帳・精神障害者保健福祉手帳・戦傷病者手帳・被爆者健康手帳所持者とその介護者(1名)は無料



「飛騰」は郵送料のみのご負担でお届けいたします。購読希望の方は120円切手をご希望回数(4回分まで)お送りください。  
 〒781-0262 高知市浦戸城山830 高知県立坂本龍馬記念館「飛騰」購読係 まで



「龍馬が七歳だったころ—天保期の土佐の社会とくらし—」展 記念講演会

企画展

## 「龍馬の時代の高知城下町 ～城下の風流「花台」を中心に～」

横山 和弘 氏(高知県立高知城歴史博物館副館長兼教育普及課長)



令和4年9月11日(日)  
13時30分～15時  
於坂本龍馬記念館新館1階ホール

江戸時代の高知城下町は、大きく郭中・下町・上町に分かれていた。龍馬が生まれ育つた上町エリアは本丁筋、水通町、通町などと東西に細長い町割だった。上町本丁が祭りに花台を出したか定かでないが、水通町は花台を出した記録がある。花台とは、江戸時代から明治・大正時代にかけて作られた山車(だし)の一種で、笠鉦・花鉦ともいう。祭礼の賑わいを演出するもので、1700年代後半頃から、歌舞伎や浄瑠璃にちなむ人形を飾り、何層もの

楼閣をかたどったタイプの花台が登場した。これらの花台は担いだり車輪を付けて引いたりするもので、各町で作る花台で意匠や大きさを競った。山車を出す祭りは主に都市部で行われ、全国各地にある。

高知では、野中兼山が失脚した翌年の寛文4(1664)年、朝倉神社の祭礼で笠鉦二基を出したのが最初とされる(『南路志』に笠鉦の絵や記述あり)。天和年間には下町の要法寺町が潮江天満宮の祭礼に笠鉦を出し、元禄12(1699)年には比島神明宮・石立八幡宮の祭礼に「ダンヂリ」が出た。寛延2(1749)年には、潮江天満宮の祭りに下町の朝倉町から花台の願いが出、許可された。宝暦元(1751)年には上町の水通町が石立八幡宮の祭礼に花鉦を出し、天明年間には下町の八百屋町から出た花台の久米仙人の人形が話題となった。文化3(1806)年には、花台人形の大きさや数に規制がかけられたことから、花台人形が隆盛していた様子がわかる。花台の出る神社はいわゆる城下町の範囲でなくその周辺に複数あるが、1800年代になると城の堀の中に山内一豊などを祀る藤並神社ができ、藤並神社の花台が目される花台として展開していく。

江戸時代中後期以降、社会状況の悪化にともない、全国的に藩祖を抛り所に体制を再構築しようとする動きが現れる。土佐でも初代藩主一豊の200回忌を契機に、一豊夫妻と2代藩主忠義を祀る藤並神社を創る。この神社が「堀の内側」に作られたというのが大きなポイント。藤並神社は天保6(1835)年に「大明神号」が許され、翌年にそれを記念した大規模な祭りが行われる。現在の山内神社の場所が御旅所となり、城下を席卷するおなばれが行われる。祭では村々の芸能も披露され、10万人以上が集まったとされる。

この祭りに登場する笠鉦・花鉦14基について、囃子や人形、摘画の数の記録がある。花鉦と笠鉦の違いはよく分からない。下町の縦堀南側地区は潮江八幡宮に出し、北側地区は藤並神社に出している。3日間の巡行ルートも判明し、追手筋を通っていることもわかる。天保7(1836)年以降も藤並神社の祭礼は続いていたと思われる。この年2歳だった龍馬も、のちには花台を目にしたかもしれない。

嘉永6(1853)年から明治6(1873)年までの藤並神社の祭礼記録を見ると、土佐には政治的な混乱もありながら、町人は毎年のように祭に花台を出し続けている。潮江天満宮の祭礼に出た花台の絵(土佐年中行事図絵)には、八百屋町の武市甚七が作った仙人の人形が名物として描かれている。また、花台の後ろには「番号ヲ表スルモノ」と記されており、花台には出る順番があったのかもしれない。

明治以降も祭りに花台は出るが、明治7(1874)年ごろから規制が出されるようになる。例えば明治10(1877)年には、花台を出すのは「無益の失費」「多少の悪弊を醸長」するものとして「不都合」だとされている。明治28(1895)年頃には電線の普及にともない花台が低くなる。明治30(1897)年頃からは夏祭りや大きな催し等での花台が盛んになる。寺田寅彦は「子供花台」の存在を記している。以後の花台は、移動しない「据付花台」「定置花台」に移行し、江戸時代以来の移動する花台は姿を消した。

明治23(1890)年の『土陽新聞』に、昔隆盛したものととして花台の記事があり、河田小龍の絵が添えられている。花台の囃子を「トンリュウ」と表現するが、「トン」は太鼓、「リュウ」は胡弓の音を表すものではないか。昭和9年生まれの男性の証言によると、昭和15(1940)年、当時6才で見た紀元二千六百年の祭りの花台が、最後の花台ではないかということがある。

明治44(1911)年、来高した閑院宮夫妻が高知公園で見た花台は「据付花台」だと思われる。大正11(1922)年に東宮(のちの昭和天皇)が行啓した際には、「古式花台」を台覧したと新聞に書かれている。この時の花台は「土佐名物花台」として、古い絵はがきに姿をとどめている。

## 企画展 「龍馬最後の帰郷——坂本家と川島家・中城家——」展

## 「龍馬と天皇と長州」

一坂 太郎氏 (秋博物館特別学芸員)

令和5年1月14日(土) 13時30分～15時

於 坂本龍馬記念館新館1階ホール

レジュメ冒頭にある画像は、『権崎剛十郎の手紙とその生涯』の口絵で、坂本龍馬筆とされる「令窮皇国(皇国を窮めしむ)」という書。権崎剛十郎は慶応二年に起きた第二奇兵隊脱走事件において、脱走を止めようとして斬り殺された人物。この書を故土居晴夫氏に見せたところ、「皇国などという言葉を龍馬は使わない」と言われた。自分もこの書は偽物だと思うが、今になって本当にそうだろうかと思える。



幕末の思想的な出発点は「尊王攘夷」で、後期水戸学から出ている。「尊王」は、日本は野蛮な外国と違い「皇室」という一本の筋が通っている、という国体論。「攘夷」は国防論。これを合わせた「尊王攘夷」が、日本中に広まってゆく。会沢正志斎の「新論」には、皇室を世界の核とする神国思想がよく表れている。長州藩は赤川淡水(佐久間佐兵衛)や吉田松陰を通して、尊王攘夷論の影響を強く受けた。もともと長州はおとなしい藩で、薩摩や土佐のように有志大名として国政に加わらなかった。ペリー来航時、剣術修業のため江戸にいた龍馬は、父宛の手紙に「異人の首を取って帰る」と書いている。この手紙は坂本家経由で出てきたものでなく、突然活字となって現れたもので、半々ぐらいで偽物ではないかと考えている。当時の龍馬は尊攘論に興味がうすく、安政5年に水戸藩の住谷寅之助が土佐の国境で龍馬に会ったが、「龍馬は時勢にうとく、時間を無駄にした」と日記に書いている。長州の久坂玄瑞は英語学習のため江戸に遊学する。輸出過多が急激な物価高を招いたと知った久坂は、庶民の暮らしを守るため政

治運動を始める。久坂は薩摩の権山三円、土佐の武市半平太らと横のつながりを作り(横議横行)、おのおの藩を天皇の命で動くようにしようとする。武市は帰国し、土佐勤王党を作るが、血判状は原本がなく、信憑性に欠ける。血盟者の8人までは江戸、9人目からは土佐だが、9人目が龍馬という点も怪しい。龍馬がいつ尊王攘夷思想に「感染」したかという点、武市の使いとして長州の久坂に手紙を届けに行った時だろう。当時の長州は久坂の思い通り勤王一色にならず、長井雅楽の「航海遠略策」によって政局に進出していった。時の孝明天皇も内々では開国を避けられないと考えていたようだが、開国の勅許を与えなかったことで攘夷主義だと思われていた。しかしこのままでは天皇の威厳を保てないため、長州の航海遠略策に乗ろうとしていた。久坂はこれを嘆き、長州に来た龍馬に尊王攘夷の集中セミナーを10日ほど行ったのだろう。土佐や長州は無理でも、薩摩は攘夷のために動くと思われる。龍馬は武市に説いたが武市は乗らず、龍馬は文久2年、薩摩の拳兵計画に参加しようと脱藩した。しかし薩摩の島津久光は拳兵する

つもりはなく、勅をもらって幕府を改革しようとする。その結果徳川慶喜の将軍後見職、松平春嶽の政事総裁職などが実現した。勅には絶対的な力があり逆らえない。結果幕府も攘夷期限を決めて実行せざるを得なくなった。

龍馬が池内蔵太の母に宛てた手紙には「朝廷は土佐より父母より大事にしなければならぬ」という神国思想の影響が見える。小説等のイメージとは異なり、実際には龍馬でもこうした発言をする。だが、勝海舟や横井小楠との出会いが、龍馬の天皇観を変えたと考えられる。龍馬は兵庫開港を恐れる孝明天皇を安心させるべく、神戸に海軍操練所を設けようとする海舟の下で働いた。しかし佐藤与之助と連名で海舟に宛てた手紙には、龍馬らが外国船を全て打てるとの天皇の方針を変えさせるため、大奔走していた様子がうかがえる。

長州藩では長井が失脚し、成算を考えずに攘夷を実行しようとする久坂らが実権を握る。藩主毛利敬親は有志大名ではないので、中央政局に人脈も無く、久坂らに振りまわされる。外国船を砲撃するも、禁門の変で敗れて長州は朝敵に。第一次長州征討後、高杉晋作・桂小五郎らは武備恭順を藩是とした。

薩摩はこうした長州と手を結ぼうとする。龍馬は桂と話し合いに行くが、桂は他の長州人とは違い、神国思想に固まっておらず、薩摩と話し合いが出来るとの手応えを得る。2度目の長州征討令に薩摩

は反対し、大久保一蔵は「非義の勅命は勅命にあらず(自分たちに不都合な勅には従わない)」とまで述べる。勅が絶対であるとするれば、これは危険な考えである。この言葉は長州に届ける任務が龍馬に与えられる。もし失敗すれば提携どころか、これまでの努力が水泡に帰すかもしれない。桂という窓口を選び、長州を説いたところが、同盟における龍馬最大の功だったと考える。それは天皇の政治利用を、薩長の指導者たちが共有したことを意味する。

世に言う「新婚旅行」で、龍馬が高千穂峰の天逆鉾を抜いたという話がある。原理主義的な神国思想ならばそんなことはしない。慶喜は、孝明天皇が認めなかった兵庫開港の勅許を、明治天皇の代になって得ることに成功し、慶喜の動きを警戒した薩摩は武力討幕に傾いてゆく。薩土盟約で土佐が大政奉還を持ち出し、薩摩に待ったをかけるが、イカルス号事件によって時機を逸する。慶応3年9月、桂こと木戸が龍馬に宛てた、討幕を舞台劇にたとえた手紙には、天皇は登場しない。同じ頃、薩長は天皇を「玉」と呼んだ。

明治16年発表の『汗血千里駒』では逆鉾を抜いたのは妻りょうで、後日知った龍馬は怒ったことになっていく。これは龍馬を「勤王の志士」に祭り上げるための苦しい改変だろう。「口惜しい」と怒ったりうは、いくつかの回顧談を残し、その改変を正そうと努力している。

## 特別展「龍馬の師 勝海舟生誕二百年」展

## 「海舟・龍馬の海防論の礎

## —伊勢国松阪の竹川竹斎と松浦武四郎—

山本 命氏（松阪市松浦武四郎記念館長）

令和5年3月4日（土）13時30分～15時

於 坂本龍馬記念館新館1階ホール



古くから商人の町として栄えた松阪市には多くの豪商がおり、三井家発祥の地のほか旧小津清左衛門家、旧長谷川治郎兵衛家（重要文化財）などが現存する。松阪は伊勢神宮参詣のために多くの人や物、情報、文化が行き来する場所であった。

嘉永6年のペリー来航に伴い、勝海舟は海防に関する建白書を2回提出している。海舟の建白に影響を与えたと考えられるのが、松阪の豪商であり蔵書家でもある竹川竹斎、そして龍馬が志した蝦夷地開拓の背景には、同じ松阪出身の松浦武四郎の存在があった。

長く泰平の世が続いた江戸時代、日本の端がどこからどこまで、端がどうなっているかを考える必要はなかった。

た。ヨーロッパ諸国はアジアにも植民地を拡大し、貿易の拠点とした。アヘン戦争における清の敗北は、日本にも大きな衝撃を与えている。アメリカは清と結んだ望厦条約と同様の条約を求め、日本に開国を要求した。これに対し幕府は広く国内に意見を求め、結果として幕藩体制は弱体化し、尊皇攘夷思想が高まった。

海舟が提出した建白書「愚衷奉申上候書付」では、軍制改革、人材登用、訓練の3つを課題として掲げている。加えて軍艦が必要だが訓練不足のため、まず江戸の防備を固めるべきとする。次いで出された2通目の建白書はより詳細で、第一に下情を汲むことができ、第二に軍艦建造の必要性（莫大の費用は交易の利潤を充て、税金を使つてはならない等）などを掲げる。

海舟の『氷川清話』には、箱館の

豪商である渋田利右衛門が、自分に万一のことがあった場合に頼るべき人物として、嘉納治右衛門と竹川竹斎の二人を挙げたとある。竹斎の弟で江戸の商家竹口家を継いだ信義も海舟と親しく、嘉永元年3月の信義の日記には「箱館之人（渋田か）」「御旗本鉦術家（海舟か）」が訪ねてきたと記される。

海舟はたびたび土産を持って信義を訪ね、金を借りているが、信義に提供した情報は竹斎にももたらされていた。海舟は嘉永3年5月に初めて竹斎と会い、安政2年には海防体制見分のため伊勢を訪れた海舟と竹斎・信義が懇談、竹斎から海舟に太刀が、海舟から竹斎に馬上銃が贈られた。この太刀は海舟の写真にも写っている。

竹川竹斎は文化6年、現在の松阪市射和町生まれ。父は東竹川家6代目当主で本居宣長門下、母は神官の娘。竹川家は両替と太物を商い、幕府御為替御用方を務めていた。竹斎自身は諸字に通じた博覧強記の人で、商人として射和の人々のために公共事業を行い、蔵書をもとに「射和文庫射陽書院」を創設した。これには知識を地域の人に開放することで農商が盛んになり、ひいては富国につながるの考えがあった。また、産業振興のため茶・桑の栽培を勧め、輸出品につなげようとしていた。アヘン戦争によって茶や絹の需要があることを知っていたためである。一方で「護国論」「護国後論」

を著して開国・通商を主張、攘夷思想には批判的であり、幕末の幕閣中枢に強い影響を与えた。小栗忠順やヘボン、パークスらとも面識があり、パークスと面会時にベアトが撮影した写真が残っている。維新により幕府預け金の全てを没収され、家業が大きく傾いた。明治15年74才で没、墓所には海舟揮毫の篆額「竹川竹斎翁之碑」が刻まれた顕彰碑が建つ。

「護国論」では、輸出品が不足した場合に金銀が流出するため、穏便に断り、強いて求められれば打払いもやむなしとする。西洋式軍艦は輸送、貿易に役立つほか、密貿易の取り締まりなどにも利用でき、その利益で軍艦を増やせると説いている。「護国論」は幕府内で回覧され、高い評価を得たことが、信義宛の海舟書簡からわかる。

他方、松浦武四郎とつながりのあった龍馬については、海舟の「幕末日記」に龍馬の言として「過激の志士たち数十人がみな蝦夷地開拓に発奮している」と記される。実際、北添倍磨ら土佐勤王党一行が蝦夷地を巡り、北添は武四郎と面会、武四郎宛の札状も残っている。武四郎は志士たちとの交流から「新葉和歌集」の再版や、竹島（現在の鬱陵島）の重要性を訴えた「竹島雑誌」の出版などおこない、海援隊の「雄魂姓名録」には、武四郎の名もある。龍馬の志は甥の坂本直、直寛、直寛の孫の直行らに引き継がれている。

# 元亀天正の頃

宮川 禎一

一昨年の七月、滋賀県の湖北にある賤ヶ岳にリフトで登り、その雄大な景色を見ながらボランティアガイドの方が語る天正十一年の「賤ヶ岳の合戦」の顛末を拝聴しつつ「これは龍馬とも関係がある話だ」と思った。

「元亀天正の頃」とは親戚の川原塚茂太郎への龍馬の手紙(推定文久三年八月)にでてくるフレーズだ。茂太郎さんに坂本家の後継者問題を相談する内容である。勝海舟のもとで海軍修行に励む龍馬

なのだが、兄権平からは「十年後は土佐へ帰って坂本家を継げ」などと言われた龍馬がそれを断って「春猪に婿養子をとって」と茂太郎さんに頼んでいる。その中で現代の様子(錦江湾での薩英戦争や下関での攘夷砲撃事件)を受けて「今時の海軍修行というのは元亀天正の頃の武士のようだ(実戦が練習だから死ぬかも)」などと書いている。龍馬の認識は「いま生きている文久三年は戦国時代の最盛期と同じだ」という意味だ。

もちろんこれは信長・秀吉の活躍した時代の歴史物語、たとえば『太閤記』などに出てきそうなフレーズだ。講談師が「時は元亀天正の頃。織田上総介信長公は明智日



主君柴田勝家の身代わりに討死した毛受兄弟の墓(長浜市余呉町)

向守光秀の謀反のために洛中は本能寺にて壮烈なる最期を遂げ〜」などと語っているはずだ。戦国時代の物語の枕詞だ。「治承寿永の御時に〜」は源平合戦の枕詞である。「激動の昭和史」とかもそう。その元号を聞くこと歴史物語が脳内で再生を開始するのだ。「時は西暦一五八一年〜」では講釈は盛り上がりすぎないだろう。日本に元号があつて良かった。

賤ヶ岳の合戦とは織田家の後継者をめぐり宿老柴田勝家と新興の羽柴秀吉とが激突した戦いだ。秀吉の天下取りを決めた合戦でもある。湖北の山々に布陣した柴田軍とその南側に対峙した秀吉軍の陣地を想像しながら、天正十一年五月二十日のその日に思いをはせた初夏の一日であつた。

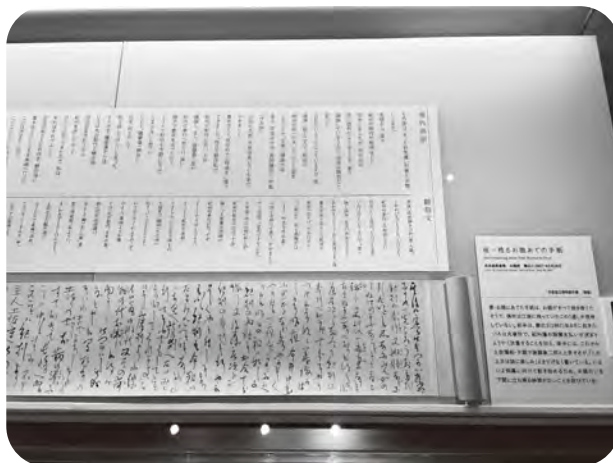
## Twitter

### 高知県立坂本龍馬記念館

@ryoma\_kinenkan

2月14日 投稿分

筆まめな龍馬なので、妻・お龍にもたくさん手紙を送ったはず。龍馬没後に焼いたとも言われ、現存するのは1通のみとされています。今日はバレンタインデー、お龍との結婚発表は慶応2年2月です。



## 特別展

# 龍馬の師 勝海舟 生誕二百年展

4月16日(日)まで開催中!



高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会  
〒781-0262 高知市浦戸城山 830

TEL (088) 841-0001 FAX (088) 841-0015  
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp